

触れ合うことのできない環境でも

馬場 久志（埼玉大学）

コロナ禍が 問題を浮き彫りにした

子どもの権利・子どもの目線

新型コロナウイルスの感染が広がった2020年春、感染対策として命を守ることが最優先だとして、子どもたちをはじめ人々の社会的断絶が図られた。これは、命を守るといえるのかを考えると、死なないということ、命の保障であることは、論を待たない。しかし、命、つまり生きるということには、人間らしいもつと主体的で自由で将来展望のある意味が含まれなければならないことを、思い知らされた。

子どもたちは、突然に学校から閉め出され、自宅に留め置かれることとなった。卒業・進級を目前にしてぐっと成長するはずの年度末に、政府の一言で子どもの行動が封じられた。その後、大人たちは子どもを守るために、悩み、知恵を絞り、ときには激し

い議論もして、子どもたちへの処遇を決めてきた。しかしその時に、どれだけ子どもは意見を述べられただろうか。意見より前に、どれだけ丁寧に事態を知らされていただろうか。子どもの権利条約が採択されたから30余年を過ぎた今日、子どもの意見表明権という言葉は知られるようになってきた。こういう時にこそ生かすべき権利のほずである。

子どもたちの声に耳を傾ける余裕のない大人たちの状況の中でも、いくつかの試みがある。その一つは、2020年に二度にわたり行われた国立成育医療研究センターコロナ×子ども本部の調査である。新型コロナウイルスへの知識、意識やストレス状況など多角からの質問の中には、「こどものことを決めるとき、おとなたちはこどもの気持ちや考えを、よく聞いていると思いますか？」という質問もある。年少児では肯定回答の方が多いが、12歳以上から肯定否定回答がそれぞれ約4割と拮抗していた。

この調査で目がとまったのは、自由記述の中の一つ、「子どもをバイ菌あつかいしないでほしい。」という回答である。子どもでなければこういう表現は生まれないだろう。大人は子どもをウイルスから守るため、近づかない、さわらない、手をよく洗うなどの矢継ぎ早のはたらきかけをする。これが子どもの目からは「バイ菌あつかい」という拒絶メッセージに転じていることに、真面目な大人ほど気づきにくいかもしれない。

時間空間ともに過密な学校教育

長い学校休業期間を経て再開した学校では、行事も夏休みも切り詰めて、教育課程の消化に懸命である。新型コロナウイルスのせいであるように見えるが、コロナでなくてもこのようなことになっていた。新学習指導要領では、中教審答申が「今回の改訂は、学びの質と量を重視するものであり、学習内容の削減を行うことは適当ではない。」と述べながらも、「上限であるとされた前回改訂

特集 新型コロナ禍にどう向き合う

の授業時数を更に上回る改訂は、教育現場にとっては負担の増となる。」とも言わざるをえないほどの教育内容が課せられていた。それ以前から、学校では標準授業時数を上回る授業時数を設けていたが、この傾向は年々拡大し、文部科学省調査では2018年度計画において標準授業時数で行っている学校は小学校では1割もなく、中学校で1割強という実態となった。このため、2019年3月の文部科学省通知「学校における働き方改革に関する取組の徹底について（通知）」で「各学校の指導体制を整えなのまま標準授業時数を大きく上回った授業時数を実施することは教師の負担増加に直結するものであることから、このような教育課程の編成・実施は行うべきではない。」などと言わざるを得ない状況がもともとあった。その問題を抱えたまま学校臨時休業を行ったのであるから、破綻に輪をかけてしまったのである。コロナだから大変な状況になったのではないことを、教育課程実施の見直しの問題として考えるべきである。

感染の危険を避ける教室環境を考えるにあたり、改めて今の教室環境が過密状態であることの問題も浮き彫りとなった。2メートルは無理なので、レベル1や2なら1メートル

トルを目安にとか、距離にこだわらず換気をとすることが文部科学省資料では示されているが、図にもあるように、85センチメートルの前後間隔が限界である。加えてこの例は、机間に人が通る間隔がとれない不自由なものである。そもそも教室空間が生活空間としては劣悪で、子どもを詰め込むだけのものではないことを再認識させられる。

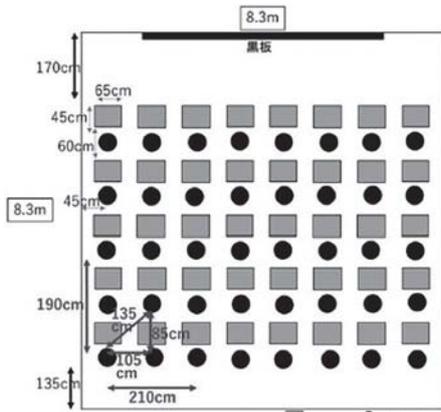


図 レベル1・2地域の参考例 (文部科学省, 2020より)

図 教室配置例

レベル1・2地域の配置図例として文部科学省「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル『学校の新しい生活様式』」(2020年9月)で示されたもの

社会のひずみと過去への回帰

感染防止で抑制された生活の中で、家庭内の暴力や虐待、公共の場での暴力暴言が生じていると言われる。それはより弱い立場の者を攻撃する行為である。また戦前の自警団や隣組のような監視に傾注する人々も現れている。「正義」のためには非法行為も許されるという理屈が用いられる。いずれも、制裁されることの責任は本人にあるとする自己責任論が根本にある。

非常時という言葉も聞かれるが、非常時の最たるものは戦時である。戦時にはこうなるのかと想像のすることも、多々見えてきた。コロナ禍が、見えにくく進行していた社会のひずみと「戦前」になりにかぬない危うい回帰を浮き彫りにしたといえる。

学校と教育の課題

学習偏重への警鐘

最近、国連の機関であるユニセフが、世界の子どもの幸福感についての報告書を発表した。3つの次元でまとめられた報告で、うち幸福感の次元では日本の子どもは38か国中の37位であったことから、深刻な結果としてマスコミでも多く報道された。

ところで、この報告書にある第3の次元は子どものスキルである。日本の子どもは

27位だという。これは学業スキルと社会的スキルからなる。読み・算を内容とする学業スキルで日本の子どもは最上位水準だが、社会的スキルは最下位水準であった。それで総合すると27位というわけである。最下位水準だった社会的スキルは、「友だちをつくることは難しくない」が指標とされた。仲間と群れ、あるいは声をかけて親しい関係になることがためらわれるような感染環境にあって、子どもたちがつながる力をどうつけていくかの課題は、学習課題に劣らず重点がおかれてよい。

なお第2の次元は身体的健康で、死亡率とともに肥満度が指標とされた。日本の子どもは1位であるが、思春期の子どもに見られるやせ願望のことを考えると、手放しで好ましい結果とはいいきれない。

UNICEF (2020) . Worlds of Influence (Innocenti Report Card16)

オンラインのあり方

学校教育に電子ネットワークを利用したオンラインの手段が急激に広がっている。反応はさまざまである。電子ネットワークの利用環境において日本が後進国であることは意外に知られていないが、その中でも学校は貧しい環境にあって、経験のない状

況に直面している。オンライン手段の可否に固執することなく、個々の場面からいい選択をする経験の積み重ねが必要だと思われる。オンラインは画面でしか会えないからいやだと思っていたけれど、学校が再開したら皆マスクをしていてかえって表情がわからなくなったという話もある。他方でオンライン授業で教師は個々の生徒と関係づくりはできても、生徒同士の関係が育ちにくいという声も聞かれる。

こうした状況下で、企業活動を背景にしたオンライン教育の導入が、政策的に急加速している。これまでの学校の営みで培われてきた価値を見失うと、企業に集積するビッグデータに依存するほかない教育になってしまいうだろう。一つの手がかりは、失敗、無駄、非効率という面倒くさいものの教育的価値の再評価ではないだろうか。

オンライン教育の普及は、家庭にいる子どもへの朗報のように言われる。しかし、オンラインによる介入が子どもの私的領域を侵すことはないかという懸念もある。休息と安心の保障を必要とする不登校の子どもに学校と接続されることの問題はもちろんのこと、登校する子どもにとっても、学校という公的世界が家にいても入り込んでくることが、心の負担にならないだろうか。

教員と学校を支える環境づくり

長期の臨時休業で子どもたちを自宅に置く経験をした保護者たちから、「学校の先生たちはすごいと思った」という声を多く聞く。期せずして教員と保護者がわかり合える可能性が生まれている。

教員の勤務環境を改善することはもはや一刻の猶予もない課題であり、社会的理解も少しずつ広がっている。これは単に教員のためでなく、誰もが安心してこの社会で暮らすための裏付けなのである。

これからどうするか

経験したことのない状況に直面して、大人としてよかれと思って行ったことがらを、改めて子どもの権利の観点から点検したい。特に、子どもの自由の剥奪という問題が、これまで軽んじられがちであったことを、コロナ問題を機に再認識したい。

ところでコロナ問題との悪戦苦闘を経て、学校と社会への少なくとも二つの発見があったのではないか。

一つは、少人数学級が学校には必要だということである。

今回、教員たちは分散登校という少人数学級の体験をした。このことは大きい。合わせて、学力テスト結果だけを教育成果の

指標にする偏狭な見方に対して、子どもの安全と生活の質や、教員の関わりとの質という日々の生活を重要な指標にする考えが広がることが期待される。

二つは、公共機能の重要さである。

学校だけでなく、医療、福祉、行政などの機能に余裕をもたせなければならぬこと

とを人々は実感したことと思われる。これらを経済競争に放り込む新自由主義では人々を守れず、公共機能は社会が保障するべきものであることが深く認識される機会であった。そしてそれらを維持する教員はじめ教育、福祉、医療、行政そして多領域の人々が連帯する動機を得た。

私たちは今、先の見えない苦しい日々を送っているが、同時に共通の課題をもっているということでもある。これを乗り越えるために、触れ合えなくても、つながり合う、そうした関係づくりを目ざしたいし、何よりそのパートナーとして子どもたちがいることを、肝に銘じたい。

コロナ禍の子どもの貧困と教育 —「今」を生きる子どもたちに共感と希望を

白鳥 勲 (彩の国子ども・若者支援ネットワーク)

校門の外で 私たちが取り組んでいること

長年、埼玉県の公立高等学校で教員を務め、定年後の2010年から校門の外―地域で貧困世帯の小・中・高校生への学習・生活支援事業を行っています。事業は「生活困窮者自立支援法」に基づく生活困窮世帯への学習・生活支援事業で埼玉県及び各市からの「事業委託」を受け、費用は全額、

国と埼玉県及び各市が負担しています。支援対象は生活保護世帯、ひとり親世帯、就学援助世帯などで事業内容の主なものは次のような取り組みです。

- (1) 無料の学習教室の運営 (74教室、小・中・高校生1700名、ほぼ、マンツーマン指導、無料、大学生・元教員・社会人ボランティア約1000名)
- (2) 家庭訪問 (不登校・引きこもり世帯、虐待など課題を抱えている世帯へ)

- (3) 学習教室での食事提供、体験、イベント (子ども食堂、民生委員の方々の協力で毎週500食程度、野外合宿、農業体験、就労体験など)
- (4) 教育委員会、学校、SSW、民生委員、大学、農協・フードバンク・企業 (食料提供など)、社会福祉協議会などとの連携

事業の必然性

― 貧困世代3代目〜4代目

事業を始めて10年目になります。家庭訪問を通じてわかったことは私たちが現在支援している子どもたちの多くは両親、叔父・叔母、祖父・祖母が貧困状態で生活しているということ。私たちが親族の中で初めて卒業予定の高校3年生が親族の中で初めて高校卒業になるというケースが珍しくありません。まさに貧困の連鎖が固定化しつつあるといえます。一人の人間が生まれ育った環境によって人生が左右される不平等な社会が今の日本の現実です。

貧困状態で暮らす子どもが抱える困難とは何かを現場で見続けています。低い学力、不登校、いじめ被害、高校進学率の低さ（特に全日制高校の低さ―今でも生活保護世帯中学3年生の全日制高校への進学率は70%）、大人からの支えの決定的とも言える少なさ、孤立などです。一生懸命生きている子どもたちへの家庭、地域、学校という場での学び、生活への支えが不足しています。

子どもたちが普通に学校に来るには家庭での「登校のための準備」が必要です。身だしなみを整える、宿題をやる、連絡帳に

記載されている持ち物をそろえる、朝食を摂る、「いつてらっしゃい」と保護者が送り出してくれるなどです。保護者が心身の疾病、ハードワーク、ダブルワークなどで余裕がない世帯、それらの準備を整える手助けができない世帯の子どもはすべて自分でやらなければなりません。貧困世帯の子どもは登校すること自体が難しいのです。

コロナ禍で子どもたちは

3月に入り、いきなり休校となりました。私たちの学習教室も開催不能となりました。支援をしている1500世帯に週1回は電話をして「安否確認」をしました。子どもの様子を聞き取って世帯の状況に合わせた支援を3か月間行ってきました。

最も深刻なケースは学校が休校になり、給食がなくなつて痩せてしまう世帯があったことです。「安否確認」で食事の回数を聞くと一日1食・2食しか食べてない世帯が40%近くになりました。家に食べ物がほとんどないケースでは弁当や食材をもって訪問しました。週に2〜3回訪問する必要があります。世帯も10数件ありました。

休校中に多くの課題が出ました。課題が解けない、教えてくれる大人がいない、よって勉強時間が0〜10分という子どもも20%

近くいました。スタッフが手分けしてマスク、消毒液持参で家庭訪問し、一緒に課題を解いたり、通信添削、電話相談、可能な世帯にはオンライン勉強など様々な手段で課題に取り組む、学校再開時に課題未提出とならないようにきめ細やかな支援を工夫しました。

外出規制が行われて多くの子どもが「密室」状態で過ごさなければならぬ状況で、生活リズムが狂って昼夜逆転、ゲーム浸り、親子のいさかい、家庭内暴力、引きこもりなど多くの問題が起きました。保護者からの深刻な電話相談もありました。家に閉じこもって起きている時間帯はすべてゲームという子どもの家に行つて公園に連れ出して散歩したりドッチボールをしたケースもあります。

様々な理由で家庭訪問をしましたが、保護者、子どもには大変喜ばれました。親兄弟以外の人と対話できること、困っていた時に助けに来てくれたことに感謝・感激してくれました。

否定的な面ばかりではありません。学校という枠から解放されてのんびりできた、改めて友達の大切さ、先生のありがたさ、学校の大切さがわかったという子どもも多数いました。

コロナ問題で明らかになったことはこのような災難があったときに犠牲になるのは社会的弱者だということです。また、もしわれわれのような活動をしている団体、組織―社会のセーフティネットの役割を果たす―がなかったらさらに悲惨な状況になる世帯が出てくることも明らかです。日頃から福祉・医療・教育を充実させておくことが何より大切です。

学校再開の今なすべきこと ―子どもを主人公にした学習教室

学習支援事業をはじめ10年、4000人近くの中学3年生を高校に送り出してきました。多くの不登校や低学力で高校進学をあきらめかけていた生徒がいました。その生徒たちを含めて私たちが開く学習教室に通い続けた理由は何か。生徒たちに聞くところから理由がわかってきます。

- (1) わからないことをわからないといつてもいい場だから
- ―質問する力は「生きる力」につながる
- (2) となりに教えてくれる大人や大学生がいるから
- ―信頼できる、自分を大切にしてくれる大人の発見は子どもたちの希望
- ―大切にしてくれる実感は自分を大切に

する思いに変容する

- (3) 勉強ができなくても馬鹿にされない、比較されないから

―一人の人間として認めてくれる。敬意は敬意として返ってくる

- (4) 問題の意味がわかったり、解けたりする「快感」

―うれしいし、少し自分が変わったと実感できる、住む世界が広がる、見通しがよくなる―学びに向かう力

- (5) 仲間がいるから
―イベント、ボランティアで自分の役割の発見が

―「共感」する力が育つ

- (6) 無料だから

以上は私たちの学習教室教室の運営の工夫で生み出されたものです。その中身は「25人以下の少人数」「参加する子ども数の半分以上大人がいる」「競争的環境ではない」「一人ひとりの状況に応じた学習」「一人ひとりのとの対話を大切にすること」であることです。

子どもの成長発達には一人ひとりの固有の時間があります。子どもへの接し方で、私たちが日ごろから大切にしている「心の重んじを子どもにおく」ことです。

子どもの言動の背景にあるものを見る努力

力です。よって、私たちの働きかけの「成果」を性急に求めることは子どもにとってストレスの原因になる場合が多いと言えます。教えたことがすぐ点数、偏差値の上昇につながることを子どもにも要求すると子どもは「学ぶ」ことの楽しさよりも点数の高低に関心がいきます。子どもたちの何気ない日常の対話、体験、アドバイスなどは子どもたちの成長の「地下水脈」としていつか実るといえる構えが求められます。

コロナ禍のもとでこれからの学校地域で何が大切か

- (1) より困難を抱える世帯・子どもへの状況に見合った支援の徹底

―学校、地域での個別学習支援

- (2) すべての子どもたちとの丁寧な対話

―思いに共感し、支える実践

- (3) 今こそ「少人数数学級」―大幅教職員

の補充

- (4) 学習内容の精選、現場の裁量拡大

―テストで優位に立つ学習から「住む世界を広げる」学習に

- (5) 支えあう仲間集団をつくる集団教育

の大切さ

結局は普段の学校教育の充実、日ごろの実践が問われるということではないでしょう。

子どもたちの学校に 攻めの気持ちで

上尾市立鴨川小 小久保ゆかり

2019年4月、受け持ったのは1年生だった。元気がかわいい、でもトラブルもいっぱいの子もたちだった。何とか1、2学期を過ごしてようやく小学生らしくなり、最後の1か月で新入生を迎える準備をさせることで自らの成長を感じ、進級の喜びを味わわせるはずだった。しかし、一斉休校により、その機会は奪われてしまった。年度が替わった2020年4月、クラス替えはあったものの、持ち上がりの2年生を担当することになった。学年の終わりをしっかりと締めくくれなかったという心残りがあったので、あの子たちとまた新たなスタートを切り、失われた日々を取り戻したいと思った。

ところが、まともなスタートは切れなかった。校庭で担任と顔を合わせ、教室に荷物置くだけの新学期初日の後、再び休校に。2年生が一番、進級や成長を実感できる「1年生を迎える会」や、1年生と手をつない

での「学校探検」なども中止せざるを得なかった。その影響なのか、6月に学校が再開されたが、どことなく1年生気分が抜けて幼いままの2年生の姿があった。いつもの年なら、一つお兄さん、お姉さんになったのだと胸を張る頼もしい姿が見られるのに……。子どもたちの成長の機会を奪ってしまった大人の責任を感じるとともに、今後、違う形で成長の場を保障していかなければと、学年教員で語り合った。

3か月に及ぶ休校期間中に最も考えさせられたのは、どんなことを市内統一の対応にすべきで、どんなことを学校ごとの対応にすべきなのかということだ。卒業式や入学式を実施するのかしないのか、実施するなら保護者の出席を可とするのか否とするのか、休校中の課題をどのように出すのか、分散登校をさせるのかさせないのか……。当初、上尾市では、卒業式の在り方を学校任せにしていたが、学校ごとに対応が違う

ことに不満の声が保護者から上がり、後から、市内で同一の対応をするということがあった。科学的根拠が持てないなかで、全ての保護者や児童・生徒、教職員が納得のいく対応をするのは難しいに違いない。しかし、科学的でないにせよ、しっかりと根拠を持って、これは一斉対応にする、これは各学校の実態に合わせてやってよし、と示してほしかった。このような方針を一切出すことをしなかったために、各校で決めたことが次の日には市教委の一言で覆される事態が頻発した。同じ市内の学校であれば、同じ対応としたほうがよいこともあるだろう。しかし、多くのことは児童・生徒の実態に合わせ、保護者の意見も聞きながら、各校の教職員の話し合いのうえで柔軟に対応していけるのが良いと思う。しっかりと話し合っていれば、近隣の学校と違う対応をしても説明ができる。今後、何か事が起きたときには、どこまでを統一し、どこからは各校の判断でよいのか、市教委にははっきりとした方針を示してほしい。

そういった方針を何も示さない市教委に対し、上尾市教職員組合は、学校再開に向けたガイドラインを示すよう、要請を行った。「教育長への要望書」3月3日、「養護教諭と保健室の安全に係る要請書」4月15

日、「学校における教育活動の再開等に関する緊急要請書」5月12日にそれぞれ提出し消毒や清掃をどの程度まで、誰がどのように行うべきなのか、保健室や学校生活での感染対策は、何をどこまで、誰が準備すればよいのか、感染者が出た場合の対応はどうすべきか等の方針である。5月12日に要請を行ったが、再開直前まで方針は出されず、方針を待たずに各校で話し合った後になって、市教委の指示文書が届き、決めた内容が二転三転するという大混乱が起きた。その一方で、授業時数を取り戻すための土曜授業（6月と7月に各2回）や、夏休みの短縮の決定だけが早々と現場に届いた。

6月に再開した学校生活には多くの制限があった。班活動は原則禁止のため、全員一人席で、ペア学習やグループでの話し合い、発表等は行えない。工作や作文などの成果の発表・交流は、成果物（作品等）を見た（または読んだ）感想を付箋に書いて渡すなどして行っているが、低学年には文字で伝えるのが難しい子どもも多く、苦労している。音楽は、マスクのまま小声で歌う、鍵盤やリコーダーは運指のみを教える、となっており、2年生では、鍵盤ハーモニカで音を出さずに指遣いのみ練習している。しかし、いくら正しく指が動いても、音が

出せないのは何ともつまらなく、意欲が下がらずを得ない。体育は、大きな掛け声で準備体操すること、体が接触する「体づくり運動」やダンス、鬼ごっこ、サッカー、バスケットなどの球技は禁止、リレーではバトンタッチはダメ、など。6、7月は、できないことが多い音楽は週1時間、体育も週2時間の実施となり、座学ばかりを強いることになった。

9月の初め、クラスみんなでできるレクを話し合った。「椅子取りゲームは密になるからできない」などと2年生にまで発言させてしまう現実。それでも何か楽しいこ

とをしようと知恵を絞り、宝探しゲームをした。けなげな姿にじいんとした。「守ってばかりじゃつまらない、攻め」の気持ちで一緒に楽しもう。これは、「健康を守ることも大事にしながら、それでも学校生活をみんなで楽しんでやるんだ、という攻めの気持ちをもってコロナ期を乗り越えよう」という、私から子どもたちへの2学期最初のメッセージだった。

2学期はまだ始まったばかり。コロナとの闘いも長期戦が予想される。これからも攻めの気持ちを忘れず、子どもたちと楽しみを探し、見つけ、作っていきたい。

トツプダウン施策に揺れる 学校現場

現場無視の教育施策の始まり

突然の休校となった現場では、3月13日の卒業式が目前に迫っていました。例年ならこの時期に、義務教育9年間の総括として、自分史をまとめてみたり、保護者への

さいたま市内中学校 教職員

感謝の手紙を作成したり、友だちと思い出を語り合ったり…という貴重な期間です。それができなくなり、卒業式の実施さえ危ぶまれる中、3年生担当の先生方は、何か思い出に残るものが作れないかと考え、3年間の思い出を振り返るDVDを作成しよ

うとする動きが多くの学校でありました。子どもたちとSNS等にアップロードしないという約束をして、せめてもの卒業のプレゼントにしようと考えてのことです。教育委員会はこの動きに対してストップをかけ、絶対にDVD等を配ることがないように通達を出しました。3年生担当の先生方は、個人情報流失につながるから泣く泣く作成をあきらめたということです。

ところが卒業式の数日前になって、校長から突然の一斉メールが保護者宛に配信されました。その驚くべき内容に目を疑いました。その概要は「卒業式に参列できない保護者のみなさまのために、各学校で映像等で見ることができるよう工夫しています」というものでした。あまりにも急だったことに加え、今までの個人情報保護の視点を180度転換する内容に呆れるばかりです。もちろん、そんな準備をしている学校はほとんどありません。結局、そのメールに対応して、急遽業者を入れてネット配信した学校もあれば、職員がビデオ撮影を行い後日DVDを渡した学校もありました。また、個人情報流失の問題があるので、原則通り映像データを配信することも、DVDの作成もしなかった学校もあります。教育長からの一斉メールは、学校に届くの

とほぼ同時か、むしろ保護者の方が早く知るといふ有様で、その後も何度もくり返されました。一斉メール問題は学校現場を置き去りにし、現場を完全に無視する姿勢を鮮明にしたものです。私たち教職員は、そうした教育施策の後始末をさせられるという役割を与えられたのです。

上意下達のトップダウン施策

まるで、お上からの有無を言わせぬような教育施策が続きます。主なものが次の5点。

- ① 土日を含めた校庭開放に関わる一斉メール（3月中旬）
- ② デジタル授業用のコンテンツ作成に関する研修会（4月初旬）
↓
いわゆるスタディエッセンスのこと
- ③ インターネット環境の調査と回線契約の業者斡旋問題（5月中旬）
- ④ 「医療従事者への10万人の拍手」問題（6月中旬）
- ⑤ 小学校6年生への「英語トライアル」実施問題（8月末）※中学校では「英検1B」と「GTEC」を実施

②のデジタルコンテンツの作成は、4月10日に市内の校長・ICT担当が集められ、一質問は受け付けず各学校に分担を押しつけ、作成を強制的に命じたものです。しかも、さいたま市のICT教育推進のためのもので、「どこよりも早く！」と教育長は作成を急がせました。多くの教職員が目の前の子どもたちのためにわかりやすいコンテンツの作成をめざしましたが、次年度以降の使用を考えた市教委は教科書の活用を不可としました。このデジタル教材の作成が、コロナ禍で苦しむ子どもたちの学習支援よりも『さいたま市の教育は日本一』のアピールに使われたことは本当に悲しいことです。

④の「10万人の拍手」も唐突な指示でした。ようやくクラスの生徒全員が通常登校できるようになった初日に、市内の児童・生徒全員に拍手を強制した施策が本当に「心を育てる意義深い教育活動」なのか甚だ疑問です。「なぜ拍手を送るのか理解していない子どもがいる」「感謝の気持ちは指示されて生まれるものなのか」「ポーズっぽくて嫌だな」等の意見がある中で強行されました。5月末に都内の上空をブルーインパルス6機が飛行した自衛隊のパフォーマンスを、市内の子どもたちを駆り立てて



朝日新聞（6月14日・埼玉版）

実施したもののように感じたのは私だけではないはずです。

この他、公教育が大手通信業者を斡旋したり、英語に特化して授業時間に民間業者のテストを実施するという施策についても、何の説明もないまま強行されています。コロナ禍の今だからこそ、一人ひとりの子どもと丁寧に向き合い、子どもたちの学びに何が必要なのか、じっくりと考えたいものです。トップダウン・パフォーマンス重視の教育施策では何も解決できないのですから。

いまこそ少人数の授業の ありがたさを

県立小鹿野高校 説田三佐子

はじめに

私が短時間再任用で勤務している小鹿野高校は、埼玉県の最北西に位置し、両神山をはじめとする山々に囲まれた自然豊かな小鹿野町にあります。歌舞伎の盛んな地域としても良く知られています。

9月20日現在、埼玉県でコロナ感染の発生していない自治体はこの小鹿野町のみです。のどかな風景が広がることもあり、コロナ騒ぎとは無縁のようにも見えますが、決してそうではありません。隣に位置する秩父市は少し前に2名から一気に29名に感染が拡大しましたが、小鹿野高校の生徒の半数以上は、その秩父市からバスに乗って通学しているからです。学校再開時は、バス内が密でないか生徒の乗車状況を観察しましたし、個別には他校並みに心配することもありました。

少人数学級展開の小鹿野高校と臨時休校

それでも小鹿野高校にはこの間大変恵まれていると思われることがいくつもありました。小鹿野高校の今年度生徒数は1年67名、2年73名、3年60名、全校生徒200名です。それを各学年4クラス展開していますので、最も多いクラスで19名、最少で14名です。

細やかで密な対応

一クラスあたりの生徒数が少ないので、休業期間中担任はともまめに生徒に連絡を取り、課題の進捗状況も含めよく生徒のことを把握できていました。特に小鹿野高校に進学する生徒には、中学時代に不登校を経験したり学習に自信が持てなかったりする生徒が少なくないので、休業中のこまめな連絡はとても重要でした。

ストレスの少ない学校再開

また、学校再開時は、初めからクラス単位の一斉授業が可能でした。もちろん最初は他校同様学年別に日を替えて登校しました。その上で他校は義務制も含めて、分散登校として20人ずつにクラスを分けて2展開の授業が行われたと思います。しかし、小鹿野高校は1クラス最大19名ですから、授業中は学習活動に合わせて教員が生徒間を移動しやすく、立ち止まったりしゃがみこんだりしながら個別指導を自然に行えるゆとりがあります。コロナ禍にあっても十分に生徒間の距離を保てるので、分割して授業を行う必要がなく、初めから通常どおりの一斉授業が行えました。これは、教員にとって1クラスあたり2回授業を行う負担がなかっただけではありません。それ以上に、生徒にとって、学校再開と同時にクラス単位の日常の学校生活に戻れたわけで、精神面で大変良かったと思います。クラス全員で顔を合わせて一日の学校生活を始められるということは、コロナ禍で様々なことが制限され自粛しなければならぬというストレスを溜め込んでいる生徒たちにとって、ほっとできる自分の居場所がい

つもと変わらずそこにあるということでした。もちろん教室の換気や消毒には細心の注意を払っていますが、密にならないよう必要以上に神経を使わなくて済み、また、実際密になりそうな場面が少ないことは、教員も生徒も過度なストレスがなく大変助かっています。

生徒理解につながる丁寧な課題 添削

さらに、休業中の課題についても恵まれていました。小鹿野高校でも休業中3回に渡って、生徒に沢山の課題を出しました。私は国語科ですが、必要かつ生徒が取り組みやすい課題を考えるのも大変でしたが、添削の方が数倍大変です。登校日毎に課題がどつと上がってきます。しかし、これも、1クラス18人程度というのはとても添削がしやすかったのです。楽だということではありません。丁寧に、細かいコメントも書き入れる時間が十分とれます。まだ顔も見えない生徒達でしたが、添削しながらどのように学習に向かう生徒かおおよそ理解できました。もちろん、学校再開後、課題添削段階での生徒理解は修正があったり多面的になったりしましたが、細かな添削によって学校再開後の生徒個々の把握や

関係づくりが例年になく早く順調だったように感じました。添削では、漢字練習などもすべて一文字ずつ細部までチェックし、間違いを添削します。基礎で躓いている生徒も少なくないので、中には、びっくりするような書き間違いをする生徒もいます。そこで、間違いを細かにチェックし、学校再開後に個別に呼んで、間違いを丁寧に説明しその場で書かせ、正しい書き方に慣れるよう指導しました。そういう丁寧な個別指導は経験上40人定員の学校ではなかなか難しいのです。

コロナ禍でも平常時でも少人数 学校は有益

一斉休校、その後の授業で、少人数学級の有用性とありがたみを痛感しました。社会的にも、コロナ感染拡大のもと改めて少人数学級化の必要性がクローズアップされました。中教審特別部会でもようやく少人数学級について触れざるを得ないところまで来ています。

しかし、少人数学級の有用性は感染症による非常時だけのことではありません。生徒の家庭環境が多様化し、同一校の中でも格差の広がる現在、行き届いた個別指導が、生活指導面でも学習指導面でも可能に

なりません。実際、少人数学級で学校規模の小さい小鹿野高校だからこそ、卒業に到達したり、本来の自分の持っている可能性を大きく伸ばして生き生きと活躍できたりする生徒が圧倒的に多いことを日々実感しています。しかし、それだけではありません。この間、経済界と国の教育施策として、OECDで求められるような問題解決型の学力向上を目指し、いわゆる「主体的な学び」が盛んに提唱されています。そのため

に形式化した授業方法による研究授業が初任研でも義務付けられています。しかし、本来は、多様な価値観に気づき、新しい視点や真理を発見する喜びを獲得して、未来の主権者として賢くなっていくために、自

由で主体的な学びが欠かせないのだと思います。20人程度の学級規模だったら、生徒の問題意識や自主性を引き出す授業の工夫が、あまり教師の負担なく日常的に可能になるのではないのでしょうか。今回のコロナ禍を契機に先進国並みの少人数学級が進むことを切に希望しています



「コロナ禍」の教育について 考えること

特別支援学校の教員の立場から

県立和光特別支援学校 牧野 浩

そもそも私は、自分でタイトルに使用しておきながら「コロナ禍」という表現に疑

間を感じています。禍はウイルスだけでなく、く、時の政権によってもたらされた側面も

大きいと思うからです。

2月27日夜、突然の安倍前首相による全国一斉の臨時休業要請。翌朝、学校は大混乱。県教委も混乱を極め、いったんは「感染拡大防止のため、特別支援学校も休校となる見通し」とのメール連絡がありながら、最終的には特別支援学校は感染防止に最大限の注意を払いながら学校を開くことになりました。

私たち教職員は子どもと保護者の生活を支え、子どもたちの学習を保障するために、細心の注意を払いながら懸命に教育活動を続けました。その後、緊急事態宣言を受け4月には分散登校、休校となった5月からも自宅待機が困難な子どもと家庭に対して学校を開いてきました。緊急事態宣言の解除を受け、6月からは再び分散登校が開始され、6月下旬に通常の日課で学校が再開されました。そして、夏休みも短縮されました。

私の勤務する和光特別支援学校は肢体不自由の学校です。子どもたちは、重度の障害や基礎疾患があるゆえに罹患すれば重篤化のリスクが高く、「不安で登校できない。させられない」という本人・保護者の声はいつも続いています。今年度まだ一日も登校できていない子どもも少なくありません。教

職員も保護者・子どもたちも自分自身が感染することとあわせて、知らないうちに感染を広げてしまうかもしれないことに恐怖を感じながら、それぞれの立場で感染症拡大防止に最大限の注意を払い懸命の努力を続けています。

「密」にならざるを得ない障害児教育の特性と、「教室不足」により物理的に「密」な学校の現状

障害児教育は子どもたちと「密」に関わることで成り立っています。私たちは子どもたちの正面から語り掛け、子どもの些細なしぐさや表情を読み取ります。子どもたちも私たちの表情や声色、動きなどを感じ取って反応します。子どもと接するたびに手洗い・消毒を行い、給食介助も横から行うなど、感染防止のために最大限の注意を払っています。マスクで覆われた顔で、子どもたちに教育的な意図をどうやって伝えるか試行錯誤を繰り返しています。「三密」を避けなくてはいけない。でも、障害児教育の特性から難しい。それだけでなく、特別支援学校は慢性的な「教室不足」で物理的に「密」な状態です。これは、県が学校建設を怠ってきたからにほかなりま

せん。分散登校期間は、物理的「密」から解放され、ゆったりと教育活動が行えます。これが本来あるべき姿だと思えます。ところが通常登校に戻ってからはそうはいきません。

さらに本校では一昨年度から夏休みにエアコンの入れ替え工事が行われており、今年度も残された半分の校舎の工事が予定されています。短くなった夏休み期間には終わらず、土日等に10月まで工事が続けられ、今はエアコンが使えません。代わりに各教室に2台スポットクーラーが導入されましたが、残暑が厳しかった9月中旬までは全く効果はなく、エアコンの効く半分の校舎で全校の児童生徒が学習せざるを得ない状況になりました。

会議室や集会室、プールの更衣室、印刷室、体育館前の廊下まで「教室」となり、校舎半分に全校の児童生徒が押し込められ「超過密」状態です。広い部屋は衝立等で仕切り3つのグループで使用しました。音が筒抜けで授業に集中できないばかりか、子どもによっては不意な音で発作が誘発されてしまうこともあります。感染防止のために手洗い・消毒をしなければなりません。水道のない場所も「教室」として使用していました。感染を防止し、安全を確保

することは言葉では語りきれないほど大変でした。

ICT活用はいま本当に必要か、子どもの障害と発達を押しえた学校現場での丁寧な検討を

休校や分散登校中は学習保障のためにオンラインやICT活用が求められました。本校でも学部や類型ごとに、教職員による読み聞かせ、歌・ダンスなど多数の動画等を子どもたちに向けて配信しました。私たちは少しでも子どもたちのためになるようにと動画等をつくり、保護者からも一定評価を受けました。しかし、これはあくまで長期にわたる休校に際した緊急対応です。すべての家庭が活用できる環境にはありませんでした。

6月県議会では、新型コロナウイルス対策の補正予算として、特別支援学校の小・中学部の児童生徒に1人1台のタブレット端末を整備することが決まりました。文科省の「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議」が7月にまとめた「議論の整理」にもICTの活用が強調され、学校では日常の授業に必要な教材や消耗品さえなかなか購入できないにも関わらず、ICT関連の予算は落下傘のように降って

きます。しかし、本当にいま必要なことでしょうか。

ICT活用が有効な子もいますが、情報セキュリティなど多くの課題が残されています。また、障害が重度な子どもには活用が難しく、むしろ人との直接的なふれあいや働きかけが大切にされなければなりません。強引に導入され、学校に活用が押し付けられれば、教職員の「多忙化」にも拍車がかかります。ICTの活用は子どもへの障害や発達と、それらを押さえた授業・教材づくりという教職員の本来の仕事とあわせて、時間をかけて検討していく必要があると思います。

学校現場の努力に込める施策の推進を

学校が再開された6月、久しぶりに登校してきた子どもたちの嬉しそうな顔は忘れることはできません。しかし、まだ登校できない・させられない子ども・保護者もいます。私は小学部6年生の担任をしています。私は小学部6年生の担任をしています。修学旅行も中止にせざるを得ませんが、文化祭や体験学習など子どもたちが楽しみにしていた多くの行事も中止になりました。命と安全を守りながらどのような教育活動を進めるか、教職員集団で何度

も話し合うなかでの苦渋の決断です。

新型コロナウイルス感染症の収束が見通せず、いままで経験したことのない事態が進行している中で、学校では子どもたちを真ん中に、教職員、保護者、関係者の懸命な努力が続けられています。

国や埼玉県には、感染拡大防止のために

ふりまわされる 学校現場で

桶川市立桶川西中学校 養護教諭 関谷多美子

ずっと不安。不安を抱えているというストレス。専門職として頼りにされても、どうすることが正解なのか。日々状況は変化し、情報に振り回されている。それは、二月二十七日、突然テレビを通して発表された臨時休校からずっと続いている。今までにない短い夏休みを経て、二学期が始まった今もずっと続いている。

学校という公共の場で、三密を避けることのできない場で、どうすることが正解なのか。いつのまにか手に入らなくなってしまう、定価通りのマスク。ちよつと前ま

必要な備品や消耗品を確保することとともに、物理的な「密」を引き起こしている「教室不足」を抜本的に解決するための学校の施設・施設設備の充実、教職員の大幅増員など、現場の声に耳を傾け施策をすすめることを切望します。

ではお手頃価格でいつでも購入ができていたのに。

子どもたちの体温チェック。衛生面や短時間で計測できることから非接触型の体温計を用意するように管理職から言われる。しかし、カタログに載っている保健メーカーが出しているものが手に入らない。今まで聞いたことがないメーカーで、しかも値段が倍以上もするものなら数本用意できると業者がいう。業者は「すすめません。体温計ではなく温度計ですよ。」と、言う。朝、子どもたちは教室で健康チェックの

個票を提出する。連絡もなく登校していない生徒は毎日いる。その生徒への電話連絡に追われる中、各フロアで副担任が、体温を測ってきていない生徒を非接触型のもので検温している。

どの消毒薬が安全で有効なのか。いつでも手に入っていたのにお店から姿を消した消毒用エタノール。手指消毒用のアルコールを注文すると入荷は一、二カ月先になるという。詰め替え用の液体せっけんの入荷も同様だった。手すりやドアノブ、水道の蛇口、電気のスイッチなど複数のものがさわるところは一日に一回以上消毒（衛生管理マニュアル「学校の新しい生活様式」とあるが、消毒用エタノールは潤沢にはない。代わりにキッチンハイターを薄めたものを毎日用意している学校がある。既定の濃度にうすめ、容器に小分けして全職員に配布。十五分くらいあればできることだけれど、これが毎日だとジャブのように効いてくる。次亜塩素酸水は各地の教委が民間の力を借りて安く仕入れ、学校に供給してくれている。しかし、誰かがとりにいかなければならない。毎週のこととなるとなかなかの負担増になる。

消毒薬を使って、職員みんなで手分けしてあちこちふいていく。生徒が帰った後、

勤務時間を過ぎていくが、みんな得手分けして消毒をしていく。さいたま市では勤務時間外に教室等の消毒業務を行った場合、「臨時特別業務『非常災害業務』」となりますのでフォルダに記録しておくように」と言われている学校もある。消毒のためなどのくらい我々は勤務時間を割かれているのだろう。学校を消毒する必要があるのなら、専門業者をお願いしてほしい。私たち養護教諭もへとへとだけど、放課後教材研究する時間もなく消毒や清掃活動している先生方もへろへろ。

ふと見ると疲れのせいかもしれませんのような湿疹がでて、むくんだ顔をマスクで隠し作業している同僚がいる。これ以上授業をつぶすことができないため同僚は休むことをしない。

ケガ人と病人。別々の場所に対応することを求められている。今まで保健室のなかで対応できていたことが新たな場所が必要となり、養護教諭だけでは手が足りなくなっている。体調が悪い生徒はベッドで休ませず、早退させるようになっていく。ちよつと休めば元気になりそうだと思いつつ、早退の連絡を保護者に入れる。

健康診断。昨年度末には出来上がっていた健康診断計画はすべて流れた。新たに日

程を決める。医師はソーシャルディスタンスを保ってほしいという。校医もいろいろな考え方があって、一人一人の医師に手順を確認し必要なものを揃え、必要な人員を配置し検診にあたる。校医が求める消毒薬は必要数手に入るのか。発注をかけるがいつものようなスピーディーな納品がのぞめない。小学校入学前の就学時健診も昨年同様には実施できない。多くの小学校は授業時間を割き、高学年の子どもたちにお手伝いしてもらい密になつて健診会場をまわっていた。昨年度までそんな健診だったが、今年度は違う。授業はもう、つぶせない。子どもたちを密にできない。学校を健診会場にすること自体が困難だ。

一学期の宿泊行事を延期して二学期実施予定にしているところも多い。学校の宿泊行事は家族旅行とは違う。他人と時間も空間も共有する。発熱等の体調不良者が出たとき、どう対応すれば良いのだろうか。昨年と同じように宿泊地のどこの病院でも診てくれるのだろうか。宿泊行事は本当に実施されるのだろうか、それとも中止…。どっちつかずの状態でギリギリまで判断を待つことがこんなにもストレスになるなんて。ともかく疲れた。

でも、子どもたちはすごい。楽しみながら行

事がなくなっても、土曜授業があっても、七時間授業があっても、毎日頑張っている。消毒してから校舎に入ろう、手洗いしつかりやろう、と、言われたとおりにやろうとして頑張っている。

検温して、マスクして、笑顔で登校して

くる。やっと始まった部活に笑顔で参加して帰っていく。

健康診断のこと、消毒のこと、いろいろな心配だけど学校は、子どもたちとともに動き出している。

コロナ禍の子どもたち

学童保育の現場から

さいたま市学童保育連絡協議会 事務局次長 加藤 哲夫

2月28日からの突然の全国一斉の小学校の休校措置に始まり、新型コロナウイルスの見えない恐怖と混乱は、誰もが予想しえないまま、今も現在進行形で進んでいます。

学童保育は学校の休校措置の中、8時から19時までの11時間の開設を突然に求められました。さいたま市の学童保育の実情は、民間200カ所の多くは1日8時間労働の「常勤」職員を複数で配置しています。その一方で、公立の74カ所が1日6時間労働の「非常勤」職員しか配置していません。その結果、行政は公立にとっては継続的な朝からの開設は困難だと認識し、午前中は

学校での「預かり」を実施し、学童保育の開設は平常通り午後からという選択をしました。

小学校での預かりは、子どもたちにとって、どうだったのか

ワクワクして小学校の入学を迎えた1年生にとって、「学校は楽しい所だ」と思えたのでしょうか。小学校での「預かり」は、しゃべらないように仲のいい子は別のクラスにさせられ、距離を保つとして1教室に4人ぐらいにさせられ、動き回ってはいけないなど、様々な制約がありました。多く

の子にとって、全く楽しくなくて、行くのがどんどん減少しました。

「学校に着いて登録の名前は書いたが、教室に入りたくなくて、動けなくなる1年生」「預かりに行かない子は校庭で遊べるのに、私たちは教室も出られず、遊びも出来ない」「分散登校でやっと勉強を教えてもらえたけど、預かりは自習がしんどいから行きたくない」。これらの矛盾に、午前中は学校の預かりに行けるのに、「学校はつまらなくて行きたくない」という子どもたちの声で、結局、朝から学童保育を開設したクラブもありました。

頑張ってくれた学校があった反面、ただただ安全に配慮しただけの対応を取った学校が多かったことは、混乱の中だったとは言え、本当に不幸なことでした。少なくとも、新1年生にとっては、「学校は楽しい所だ」という貴重な実感を作ることには失敗したといわざるを得ません。今後に当たっては、学校という場所が、授業を教えることができないう場所があっても、楽しい時間、有意義な時間を過ごしたいという子どもの願いを保障するには何が必要なのかというスタンダードの確立を抜きに、安易な「学校での預かり」はもう、やるべきではないと思いますが、教育委員会を含めて、

冷静な振り返りが必要だと思います。

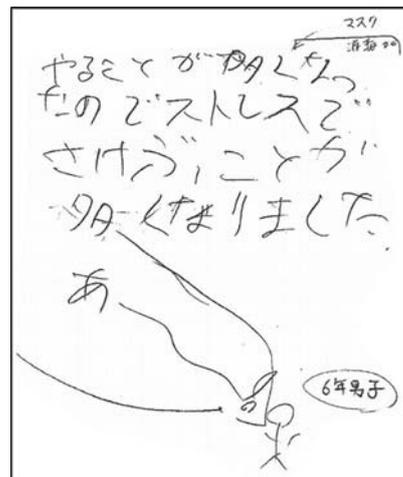
夏休みは短くされ、休校中の授業を取り戻すため、1日のサイクルも休憩やあそび時間を削られて、相当ハードなことが要求されています。1年生はついていけない子どもたちが多くないでしょうか。ひらがなでくつつきの「は、を、へ」を区別しながら読めと言われてもわからないなど、ついていけないなど、実例がいっぱいあるかと思えます。「学校は楽しい所」になるための取戻しをしなければならぬはずなのですが、なかなかそれも成功していないのが実態ではないでしょうか。

児童保育で子どもの声を聴いてみました

さいたま市の児童保育では、「子どもたちの声」をクラブごとに聴き取ったり、子どもたちに書いてもらうという事を進めてきました。いくつか紹介します。

「やるが多くなったので（マスクや消毒など）ストレスでさげぶことが多くなりました。あー（小6男子）」

「みんなが『みつ』『みつ』うるさい！『みつ』を気にしないであそびたい（小5女子）」
「もし、自分が感せんして治って、みんなに差別されることがこわい（小5女子）」



「遊べない 走り回れないから ストレスがたまってしまったりする」

「自分が感せんしているとして、いっしょに住んでいるおじいちゃんたちにうつってしまったと考えると、心配になる。（小5女子）」

「コロナにうつされてしまうのがいやです マスクがすきです アルコールもすきです つまんないです」

「おやつをみんなで楽しく食べたい」
「べつに困ったりはしないけど、遠足とか運動会とかがなくなつたのは、ちょっと楽しくない、面白くない（小3女子）」

「部屋の中でご飯じゃないときにマスクを外して話したりしているから、しっかり注意などしてほしい。くつつきすぎるから

ソーシャルディスタンスを保ってほしい。大人たちと話し合って、保護者から注意したらよいと思います（小6男子）」

子どもたちの孤立・ストレスと、専門職としての大義名分へのスタンス

コロナとマスクが嫌、コロナが怖いという声は圧倒的で、友達や家族が罹患することや、田舎の祖父母が罹患することへの不安なども含めて、私たちが感じている以上ののだと実感させられています。たぶん、大人以上に恐怖を抱いています。それなのに、密になることや友達としゃべることも制限されて、ますます孤立させられ、大きなストレスを抱えているのだと思います。そこにどう寄り添っているのかと問われています。「コロナにかかって、そのあと差別されるのが怖い」という声も、とても気になります。私たち大人の中にも、差別意識がありはしないかをしっかり自問しながら関わらないと、子どもたちには応えていけないでしょうね。

社会の一部で発生した、「自粛警察」「マスク警察」は、感染防止の大義名分をそのまま、自分の価値観や子どもたちの価値観にしていいのかという事を考えさせられま

す。高学年を中心に、「1年生がマスクを
していないことにとっても苛立つ」という
声も聞かれ、「規則を決めるべき」という
声も聞こえます。自分たちで決めるルール
は大事ですし、その不安に寄り添わないと
いけません。マスクひとつをとっても、
新型コロナウイルスへの科学的な知見や、
マスクできない子だっているかもしれない
という事まで、みんなで考えられるか、そ

コロナ禍でも子どもが安心 して通える学校に

埼玉県新婦人の会 高田美恵子

安倍首相の「一斉休校」の一言で、すべ
ての学校は「不要」などころになってしま
いました。緊急事態宣言も出ないうちに、
小規模の学校まで全て休校です。3月とい
う学校生活の大事な節目の時に、卒業式や
修了式も制限され、先生や友人とのお別れ
もできませんでした。休校になれば、子ど
もたちは家庭で過ごすことになりました。そ
のため、仕事を休んだり、仕事を辞めたり
したのは、おもに女性でした。ですから、

ういう丁寧な取り組みを抜きにはできない
のだろうと思います。

保育や学童保育は、子どもたちとのスキ
ンシップや密な関係を抜きには成り立ちま
せん。「密を避ける」という感染防止の大
義名分と、「密」「密」とうるさいとい
う子どもたちの声や気持ちにどう応えるの
か、現場では模索が続いています。

病院や保育所、介護、販売などの女性の多
い職場は人出不足になりました。子どもた
ちの安全を考えてのことなら、今すぐにで
も少人数学級にすべきです。安倍首相の独
断であり、「後手に回った」などの批判を
避けたいだけのパフォーマンス、学校と子
どもを政治利用したとしか言いようがあり
ません。

「一斉休校」を受けた現場での混乱は全
県に広がり、新婦人県本部にも様々な声が

寄せられてきました。「子どもを一人では
置いていけない」「非常勤なので無収入に
なる」など仕事にかかわることや、学校開
放をしているところでは、「一日マスク着
用で私語禁止」「立ち上がるのはトイレに
行くときだけ」「わからないところがあつ
ても不公平になるからと教えてくれない」
「先生に見張られている」「もう学校に行き
たくない」と泣いている」など、子どもの人
権が守られない状況が報告されました。ま
た、公園で遊んでいると「学校が休みなの
にんで外にいるんだ」と注意され、警察
に通報される事態も起こりました。子ども
が外に出て遊んでいないか見回りをした学
校もあったと聞いています。子どもたちは
家にこもるしかなく、遊びも友達も奪われ
ました。

そのような実態が分かってきたため、新
婦人県本部は教育委員会に要請書を提出
し、懇談を行いました。子どもを持つ若い
会員も参加し、「学校での受け入れ態勢に
工夫を」「卒業式をしてほしい」「学童保育
で学校施設を利用させて」「不足している
マスクや消毒液などを学校や学童保育施設
へ」などを訴えました。あわせて、学校が
始まってからやり残した学習内容があるか
らといって、授業時数をふやしたり、無理

なつめこみ教育をしないではほしいともお願
いしました。

4月には一斉休校が延長となり、さらに
問題が広がりました。新婦人には、「小学
校に入学したが、担任の先生の名前も覚え
ていない」「子どもを家の中だけに置いて
おくのは無理がある」「給食があったらう
れしい」「ネット配信されても利用できな
い」「先生から電話があつたがすぐに切ら
れた」などの声が寄せられました。テレワー
クで家庭が仕事場になり、家族間のバラ
ンスが崩れ、DVや児童虐待が増えることも
予想されました。また、学校からの一方
な連絡メールだけで、電話も家庭訪問もな
かったことから、「学校から見放された思
いだった」との声も聴きました。課題を出
すからあとは家庭で何とかしてというこ
とだったので。オンライン授業を行った教
育委員会もありましたが、課題さえも子ど
も一人ではできず、環境が整っていない家
庭もあり、格差がより広がりました。

そこで、新婦人県本部は、県と教育委員
会に「PCR検査の拡充、保健所の増設」
「家族が感染した時の子どもへの対応」「就
学援助金の拡大支給」「相談窓口の周知」「学
校の電話回線を増やして」「学童保育への
支援」「大学生への援助」「県学力調査の中

止」などの項目で要請書を提出しました。
しかし、コロナ対応で忙しいと懇談には至
りませんでした。

6月から、学校は再開されましたが、3
密を避けなければならぬのに、40人学級
のままです。新婦人中央本部では、全国で
学校再開緊急アンケートを呼びかけ、14
00人から回答を得ました。36人以上にな
る学級が24%にもなっていたのは驚きでし
た。「友達と会えてうれしい！」と喜ぶ子
どもたちの様子とともに、「席の移動禁止、
おしゃべり禁止」「6時間授業がイヤ」「学
校でマスクが外せない」「先生が忙しそ
うで話せない」などの声も多数寄せられま
した。また、「課題が多い」「授業の進みが早
い」「休校中の内容が親任せ」など、さら
に学力の格差が広がると心配の声もありま
した。

6月5日には、この結果をもって文部科
学省の矢野審議官と懇談することができま
した。埼玉から参加した会員が、マスクを
外してはいけないと言われるので、苦しく
なると「トイレに行きます」と言つてトイ
レの個室でマスクをはずし一息つくという
子どもの実態を報告。「ソーシャルディ
スタンスを守るために20人以下学級を」「中
学生は制服の下に体操服を着ていく、熱中

症が心配」「デジタル配信の授業は家庭環
境の差が出る」などを次々に訴えると、審
議官は3100人の先生を配置する補正予
算を付けたこと、熱中症対策には万全の備
えすること、学習内容を精選できると通知
したことなどを回答しました。その後、マ
スクの着脱については強制しないという内
容の通達が出ています。行政に直接子ども
たちの実態を伝えることで、少しずつでも
対応が変わっていくことを実感しました。

7月6日には、「子どもと教育・文化を
守る埼玉県民会議」で、県知事と県教育委
員会に、要請書を提出しました。内容は、
子どもの最善の利益を第一に考慮するこ
と、子どもたちの思いを聞くこと、そして
熱中症対策や、教育課程の編成、20人以下
学級にするなどの教育条件整備、保育所や
学童など関係機関の地域の教育充実につ
いてです。記者会見も行い、要請の趣旨と
ともに、新婦人会員の高校生を持つ保護者が
「部活も引退し楽しみにしていた行事は削
られた、受験制度の変更も不安、40人クラ
スで感染も心配」などと実状を語り、今こ
そ少数人数学級を実現してほしいと訴えま
した。教育委員会は、懇談の日程調整をする
ことを約束しましたが、いまだに実現して
いません。

12人の教育研究者が呼びかけ人になった
少人数学級を求めるネット署名にも、新婦
人は署名用紙を使って取り組み、教職員組
合と一緒に駅での宣伝も行いました。9月
17日の提出集会には、新婦人は11万筆（全
体で15万筆）を提出、埼玉県本部も630
0筆を集めました。自治体に対して少人数
学級の実現を要請、議会請願にも取り組ん
でいます。

今でも、鬼ごっこ禁止など遊びに制限が
ある学校もあり、給食時も「おしゃべりし
ないで前向いて」と言われれば、友だちも
できません。検温とトイレ掃除、教室など
の消毒で先生たちは疲弊しています。そし
て、「学習の遅れを取り戻せ」「また休校に
なるかもしれない、できる時にやっておこ
う」とばかりに、行事はなくし、土曜授業、
夏休みも短縮して、詰め込み教育が続いて
います。子どもたちにタブレットを配布し
てのオンライン授業も、様々な課題がある
ことが指摘されています。まずは、コロナ
ウイルス感染症から子どもたちを守るため
に少人数学級をすぐに実現し、子どもたち
に寄り添ってゆっくり学習を進め、安心し
て通える学校にしてほしいものです。新婦
人は、これからも子どもや保護者の声を集
め、行政に要請していきます。

● 教室から生まれた詩 ●

大きくなった私

四年 初葉

「だっこして。」

私はお母さんに言ってみた。
びっくりしたお母さん。

ソファアード

妹をだっこしていたけれど、
私にかわってくれた。

だっこをしてもらうと、

いつものお母さんの

いいにおいがした。

「大きくなったね。」

だっこしながらお母さんは言った。

「お母さん、小さくなった？」

と私は言ったけれど、

私が大きくなったんだな、

と思った。

妹はやきもちをやいていた。

「詩を書くころ」の学習で、「いえの

ひとにだっこをしてみよう」という

宿題を出しました。妹がいるので、

ふだんはお母さんに甘えるのを少し

我慢をしていたのかもしれない。

その宿題で遠慮なく甘えて、お母さ

んも快く応じています。その時の妹

の様子も見逃していませんでした。

3にんでじてん車

1年 けんたろう

きのうあめのなか

じてん車をこいだよ

はじめてできたから

うれしかったよ

そうちゃんも

じてん車をのれるようになったよ

3人でひかわじんじゃまで

1れつでむかったよ

パパをさいごにしていたよ

1年生になってようやく自転車に

乗れるようになったけんたろう君。

お父さんと弟の3人で氷川神社まで

サイクリングに行くまでになりました。

得意げになって先頭を行くけん

たろう君と、後列で子どもたちを見

守るお父さんの姿が対照的で、ほほ

えましく思えます。



(本文には関係ありません)